

平成23年度下関市立大学外国人留学生・中国引揚者等子女入学試験
出題の意図と解答の傾向

【出題の意図】

山田昌弘『少子社会日本—もうひとつの格差のゆくえ』（岩波新書、2007年）から出題をした。本学経済学部生として相応しい基礎的日本語能力、文章読解力、一社会現象に対する理解、論理的思考力を問うことを目的として問題を作成した。

文章の内容は、最近日本でよく関心が集められる少子化についての問題を取り上げたものである。文章では「男女共同参画」「女性の自立」「コンビニの普及」「社会保障制度の整備」といった日頃よく聞かれるキーワードが出てくるが、筆者がこれらの点に対して、どういう認識をしているのかを読み取れることが、文章全体を正確に理解するポイントとなる。文章を表面的にざっと読み流してしまうと、文意を全く反対に解してしまう可能性もあり、その分受験者には文章を熟読する姿勢や、比較的高いレベルの読解力が求められる。

また、今年度は文と文のつながりが読み取れているか、文全体の構成を正しく理解しているかということを問う目的で、適切な接続詞を選択する問題を出題した。

【採点講評】

<設問1>

正答率はaが最も高く、dが最も低かった。bとcについては「しゅふう」、「ふうよう」というように「う」を余計に付ける解答が比較的多かった。eについては「ぜんたい」という解答が多かった。

<設問2>

fとgの両方正解した受験者は比較적少なかった。gについては前後の文だけでなく、文章全体の意味を理解していないと正答が得られないことにより、正答率が低かった。

<設問3>

本文の1～2行目の「現代日本社会・・・必要がある」、4行目の「無理もない」、8行目の「まことしやかに語られる」、下から7行目の「本当にそうであろうか」という箇所から、筆者は下線部①に対して、一般的に言われる、「男女共同参画の進展」、「コンビニや総菜屋の増加」、「公的年金などの社会保障制度の整備」などを原因とする見方にどちらかと言えば否定的で、疑問を持っていることがわかる。ところが、多くの受験者は上に挙げた三つのような事項を筆者は下線部①の原因であると考えている、という全く反対のことを解答していた。外国人留学生にとっては比較的高いレベルの読解力が求められる問題であると言えるが、全体的な文章の構成や論理性に注意を払えば、決して難しい問題ではない。

また、設問は文章において筆者がどう見ているか、ということが問われているのであるが、単に自分の意見を述べるだけで、文章とは全く関係のないことを記述していた受験者もいた。

<設問4>

未婚化という社会現象が「原因・理由」であり、コンビニや総菜屋の発達がその「結果」であるという因果関係を、受験者自身の言葉を用いて詳しく説明することが問われる。200字以内という字数

等の関係から、下に挙げられている「市場の論理」や「昭和 30 年代の大衆食堂」に関する内容を含めての解答が理想的である。

経済学部志望の受験者ということと関係があるのかもしれないが、文章内の内容だけでなく、自国と日本のコンビニ経営の比較対照や、現代社会人の勤務形態と生活様式といった観点から、自分の考えも加えて記述した解答が多かった。

また、下線部②の前後の文をそのまま貼り付けて解答している受験者が見られたが、このような解答の仕方は相応しくなく、高い評価は得られていない。

<設問 5 >

論述の問題であるので、文章で挙げられている内容や、少子化についての一般的な観点から言われることに対して、自分はどうか考えているのかということや、うまく、明確に表現できているかがポイントである。少子化についてのいくつかの現象や、一般論をただ羅列しているような解答も見られたが、このような解答では高い評価は得られない。出題者の意図としては、設問は日本の少子化というように限定はしていないので、受験者の母国の状況と日本の状況を比較、対照した記述を期待していた面があるが、日本の少子化だけを述べる解答がほとんどであった。

表記の誤りとしては、「労働」の「働」、「適応」の「応」、「個人」の「個」の書き間違いが多かった。また「少子化が嚴重である」や「子供が生まれた」、「子供が生んだ」といった表現も目立った。

<設問 6 >

受験者が 2 名だったので、コメントは差し控える。